

派遣者番号	30K04	氏名	北川 和幸
研究主題 —副主題—	中年期・ミドルリーダーが直面した教育観の揺らぎに関する事例研究		
派遣先	創価大学教職大学院	担当教官	若井 幸子・鈴木 詞雄
所属校	日の出町立平井小学校	校長	柿崎 洋一

キーワード：教師の在り方、充実期、ミドルリーダー、教育観、ライフストーリー

## 1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

10年に1度の学習指導要領改訂。日々、矢継ぎ早に学校現場へ通知される指示伝達事項。社会の変化に対応し得る人材育成の担い手としての教師は「変わり続けること、それも出来るだけ速やかに」とせき立てられているように感じる。教師に求められる「資質能力」として、これほどに高く、幅広い人間性や社会性、多様で豊かな知識と深い専門性の向上が求められた例が過去あっただろうか。一方で、教員採用選考の受験倍率は近年減少傾向にある。また、現職教師においても、精神疾患による休職が平成19年度以降、5000人前後で推移しており、多忙でストレスを抱えていることが要因の一つと見られている。まさに、なり手は増加していないにもかかわらず、教職に就いてからの責任は重く、多忙を極め、現場を後にする人が少なからずいるのが、昨今の教師を取り巻く現実である。そんな中、多くの教師が、日々の対応に追われながらも、求められる教師像に近付こうと、自己変容を繰り返しているという、もう一つの現実がある。私もまた、その現実生きる教師の一人である。

本研究は、理想とする教師像や教育観をもちながら、求められる教師としての理想を実現すべく、学び続け、与えられた役割を遂行し続けてきた充実期のミドルリーダーに着目する。時間的推移や環境・立場の変化が伴う中で、本来もっていた教育観をどのように変容させてきたのだろうか。あるいは、私がそうであるように、自らの強い意思によって獲得・所持していた教育観が揺さぶられ、疑念が生じ、混乱した状態に直面してはいないだろうか。何れにしても、充実期のミドルリーダーのこれまでの教職経験を振り返り、検証することで、これからの時代を生き抜く教師の在り方についての課題を検討していきたい。

## 2 研究の内容・研究の方法

### (1) 対象者 小学校主幹教諭2名のプロフィール

	性別	勤務年数	経験校数	役職	分掌
教師A	男性	19年	3	主幹教諭	教務主幹 学年主任
教師B	男性	23年	4	主幹教諭	経営支援部 学年主任

調査対象の教師は、理想とする教師像や教育観をもちながらも、求められる教師としての理想を実現すべく、学び続け、与えられた役割を遂行し続けてきた充実期のミドルリーダーである。（「充実期」「ミドルリーダー」「教育観」「揺らぎ」の定義については省略）

### (2) 面接の時期と場所

期間：平成30年8月から9月

場所：勤務校の校長室及び職員室

時間：2～3時間程度

### (3) 面接・分析方法

ライフストーリー・インタビューを用いる。すなわち、充実期のミドルリーダーのライフストーリーを手掛かりに、「理想の教師像」や「子供をどのような存在として捉えるか」といった教育観が、これまでの教職経験にどのように関連付けられているのかを分析するため、語りの様式および構造に着目する。その際、教職経験をいくつかの章に分け、区分した章にタイトルを付けてもらうことで、教師としての成長や教育観の変容・揺らぎが教職段階期とともに想起しやすいようにする。

## 3 研究の結果・考察

### (1) 教師Aのライフストーリー

教師A（以下、Aと表記）の教職段階期は七つ存在し、それらの段階の内訳は、『入職前』『情熱期』『躍進期』『停滞期』『改革期』『安定期』『方向転換期』である。

## (2) 教育観についての分析

※表の下線は私による。また、本文中の「 」は教師Aの語りを引用したもの。

表2 教師Aの『入職前』についての語り

A04  
子どもって、無限の可能性があるっていうのが、自分の中にあるんです。中でも、何か一つでも、その子の今後につながるような、自信を見つけてあげられたらいいなって思っていますね。あと、自分がそうだったように、自信を持つ事ができれば何かが変わるんじゃないかってことを考えると、その自信につながる何かを、自分が行う教育の中で、見つけてあげられたらいいなって、思っていることではありますね。

表2は、Aの教育観が端的に表れている語りである。Aは、教育の主体である子供を、「無限の可能性」をもった存在として捉えている。さらに「今後につながるような自信」とは、A自身が中学校の担任教師の「教育の力」によって獲得したものでもある。その担任教師に「自分も近付ければいいな」と思って教師を志したAである。すなわち、Aの理想像は中学校の担任教師であり、子供の無限の可能性を開花させるのが教師の役割であるとの教育観を自らの意思によって獲得していると考察できる。

表3 教師Aの『改革期』についての語り

A37  
自分に与えられた新しい仕事を、教えてもらいながら頑張ろうという気持ち。新たなこと、気持ちとか。もう、一新して、学校の力になれればいいな。というので、「改革」と、名前つけたんですけどね。  
A40  
うーん。そうですね。なんかだんだん薄れてきたような気がしますね。昔はほんと、子ども、学級のこと自分の全部の力を注いだり、段々と、こう、もらう仕事が多くなってきて。そこで異動もして、全くそういう感じでもなくなって、対研究とか対先生みたいになって。それでまた、教務っていう学校をなんとかするっていうか。だから、子どもについていうよりは、ちょっと視点というか、自分の注ぐ力がそっちじゃなくなってきたような気がしますね。

表3の、「一新して、学校の力になれればいいな」とAが語るの、「2校目のときに、全く役に立っていなかった」という自責の念からきた言葉であろう。そして、改革期において注目すべき事実は、Aの教育観が、これまでの「子供、学級のこと自分の全部の力を全部注いだ」から「学校をなんとかする」という考え方に変容している。「子供の可能性を拓くんだ」と決めて教職生活を送ってきたAが、2校目において教育観の揺らぎに直面し、3校目では自らの意思によって学校のためという新たな価値観を取り入れ、教育観を変容させている。「自分の注ぐ力がそっちじゃなくなってきた」という語りは、Aの教育観が「子供のため」から「学校の力に」へと転換した事実を象徴している。

表4 教師Aの『方向転換期』についての語り

A50  
やっぱり明らかに、最初の頃に抱いていた、子どもに対する思いとかは、どんどん薄れてきたなっていうのは、もう思いましたね。今も実際そうなんです。安定したときに、心から行けていないっていうのが、こうなってるのかなって思いますね。まあ、その原因が、何なのかって、はっきりわからないんですけど。でも、そこに戻ろうっていうよりは、うん。次のステージへ行く、しか、ないのかなって。うん。  
A51  
もう一回戻ってっていうエネルギーがない。結局降りかかってくる仕事はどんどん多くなっていく。その、英語教えなきゃいけないとか。あゆみも4つも書かなきゃいけないとか。そういう、結構大変なことばかりが降りかかってくるじゃないですか。それを考えても、このままやっていけるのかなって。て、いう考えが先行しちゃって。なんか、違う路線でやって、みる、しか、ないのかなってところはありますね。でも実際そういう後ろ向きの気持ちになってるから、どうなるかわかんない。

表4で、任された教務の仕事が安定した先にAが感じたものは、「心から行けていない」と語る「子供との距離感」、「そこまでエネルギーを注げない」という現実の自分であった。「最初の頃に抱いていた、子供に対する思いとかは、どんどん薄れてきた」という語りはすなわち、Aがもっていた教育観の喪失を意味する。そして、この現実を直視するも、「そこに戻ろう」というよりは、「次のステージへ行く、しか、ない」との「後ろ向きの気持ち」に直面しているのが現在のAである。『改革期』において、自らの意思で、「学校のため」という新たな価値観を取り入れ、教育観の変容を遂げたAである。しかし、現在の『方向転換期』においてAが直面しているのは、新たな教育観の揺らぎなのかもしれない。「違う路線」とは教育管理職への道である。「やって、みる、しか、ない」「後ろ向きの気持ちになってるから、どうなるかわかんない」と語るところに、新たな教育観の獲得を模索しているAの動揺と混乱が見え隠れしている。

## 4 総合考察

解決の糸口が見いだせない困難な状況に直面した場合、各々が教育の原点である「教育観」に立ち返り、その在るべき姿、在るべき教師像を再確認し、そこに立脚した教育を行うことによってこそ、解決の糸口が見えてくるのかもしれない。その際には、私たちが当たり前のことと考え、受け入れている「求められる教師」についても、本当にそれが当たり前のものなのかどうか、吟味する必要があるのではないだろうか。この省察や批判的思考に基づいた自律性の確保こそが、本来の教育観を担保する営みであり、これからの時代をしなやかに生き抜くために必要な教師の資質能力なのかもしれない。